

# 共在状態における独り言の相互行為分析

## An interaction analysis of self-talk in co-presence

坂井田 瑠衣<sup>†</sup>, 岡野 真衣<sup>†</sup>

Rui Sakaida, Mai Okano

<sup>†</sup>公立はこだて未来大学

Future University Hakodate

sakaida@fun.ac.jp

### 概要

本研究では、共在状態においてそれまでの相互行為とは無関係に産出される発話が、どのように発話者自身によって独り言として構成され、共在している他者によって独り言として扱われるかを、相互行為分析を用いて明らかにする。分析の結果、発話者は、自身の発話が独り言であることを、発話の連鎖上の位置や身体の志向性によって示していた。共在している他者は、その発話が独り言であることを理解し、反応を示さないか、反応を示すとしても最小限に留めていた。

キーワード：独り言 (self-talk), 共在 (co-presence)

### 1. はじめに

複数人が同じ空間に共在しているものの、必ずしも常に会話しているわけではないような状況 (open state of talk; Goffman, 1981) において、参加者たちが独り言に聞こえる発話を産出する様子がしばしば見られる。

社会的相互行為論の泰斗である Goffman (1981, p. 74) は、慣れ親しんだ関係にある者どうしが近接しつつ身体的な行為に従事しているとき、時折、ふとした考え (passing thoughts) を声に出すことがあることを指摘し、共在状態における独り言の存在について示唆している。その独り言は、会話につながることもあれば聞き流されることもあり、会話におけるルールがそのときの気分次第で尊重されたり、覆されたり、無視されたりするものになりうるとしている。

そうした共在状態における発話がどのように独り言として扱われるかを、相互行為分析によって明らかにした数少ない先行研究として、Keevallik (2018) がある。Keevallik (2018) は、複数人が小屋掃除という重労働に従事している様子を分析し、周囲の物理的環境に関するコメント発話が産出された時、それが連鎖の始点 (sequence initiation) として扱われるか、独り言 (self-talk) として扱われるかを分析した。その結果、連鎖の始点となるか独り言となるかには、発話のタイミング、発話者の身体の向き、視線、姿勢、声の大きさといった時間的・身体的要因が大きく影響している一方で、発話の内容はそれほど影響しないことを明らかにした。

Keevallik (2018) は、小屋掃除のように、本質的に焦点の定まらない相互行為 (Goffman, 1963) が続きうる場面であっても、発話が特定のタイミングで特定の身体の志向性を伴って産出されることで、他者の反応を引き出し、焦点の定まった相互行為 (Goffman, 1963) を達成しうることを主張している。一方で、焦点の定まらない相互行為において、参加者らは、発話しつつも他者の反応をあえて求めないよう、自らの発話を独り言として構成し、互いに対する儀礼的無関心を維持することに志向することもしばしばあるだろう。

これまでの相互行為研究では、焦点の定まった相互行為において、発話者が聞き手の注意を獲得・維持するために用いているさまざまな方法が明らかにされており (e.g. Goodwin, 1981), Keevallik (2018) の関心もその延長線上にあるものと捉えられる。それに対して、相互行為の焦点が常に定まっているわけではない共在状態において、発話者自身がどのように他者の反応を喚起しないように発話しているのか、また他者がそうした発話者が示す志向をどのように理解した上で反応しているか (していないか) については、十分に明らかになっていない。そこで本研究では、そうした共在状態において、それまでの相互行為とは無関係に産出される発話が、どのように発話者自身によって独り言として構成され、共在している他者によって独り言として扱われるかを、相互行為分析を用いて明らかにする。

### 2. データと方法

本研究では、日本語日常会話コーパス (CEJC; 小磯他, 2023) を用いて、参加者の志向の変化を記述的にたどる相互行為分析 (高梨・坂井田, 2022) を行う。

それまでの相互行為とは無関係な発話が産出されやすいと考えられる場面として、母 (和代), 父 (辰雄), 祖母 (房), 娘 (昌美) の4人が、室内で共在し、和代の父の遺品整理作業を個々に進めているデータ (K005\_012) を用いる。複数人が共在して作業しながらも常に会話しているわけではない状況は、共在状態に

おける独り言をめぐる相互行為を分析するのに適した、見通しのよい場面 (perspicuous setting; Garfinkel, 2002) であると考えられる。

### 3. 分析と考察

まず、発話者が独り言を志向していると理解できる発話が産出され、実際に他者もその発話を独り言として扱っている事例1を分析する。事例1では、和代は手元の紐をほどこいており、昌美は撮影用のカメラの準備をしている。房は終始和代の方を向いており、辰雄は前方(部屋の隅の方向)に身を乗り出し作業している。辰雄の「横浜のはよくわかんないな」(04行目)が、どのように独り言として構成されているか分析する。転記記号は、音声発話については西阪(2008)、身体行為についてはMondada(2018)に基づいている。

事例1 (CEJC, K005\_012, 00:00-00:08)

01 辰雄 [よこは-  
02 和代 [紐があるわよこれ  
和代 >>手元の紐->>  
辰雄 >>前方に身を乗り出す->>  
房 >>和代の手元->07  
03 (0.45)  
04 辰雄 横浜のはよくわかんないな  
05 (1.0)#(0.75)  
Fig #Fig. 1



#Fig. 1 (左から辰雄, 昌美, 和代, 右手前が房)

06 辰雄 [あ  
07 房 [りんご@  
房 -->@和代->>  
08 (0.14)  
09 房 りんご[じゃないわ  
10 辰雄 [なんだろうこれ  
11 (0.29)  
12 辰雄 鉄

事例1の冒頭で、辰雄は「よこは-」(01行目)と発話し始めるが、和代が同時に「紐があるわよこれ」(02行目)と発話し始めると、すぐに発話を中断する。この和代の発話は他者の反応を求めているように聞こえるが、和代の視線は手元の紐に向いているため、特定の誰かに宛てられているわけではない。

辰雄は、和代の発話(02行目)が終わり0.45秒の沈黙(03行目)が生じた位置において、「横浜のはよくわ

かんないな」(04行目)と、01行目をやり直す形で発話する。ここで辰雄は、他の三人(和代, 房, 昌美)に十分聞こえうる大ききで発話している一方で、身体の志向については、部屋の隅の方向に身を乗り出したまま変化させていない(Fig. 1)。発話内容も和代の発話(02行目)とは無関係であることから、辰雄は和代に反応しているわけではなく、むしろ、和代が開始しようとした連鎖には参加しないという志向を示している。

04行目で辰雄が発話した後は1.75秒の沈黙が生じ(05行目)、その後、辰雄は「横浜の」に関する話題を展開したり反応を追求したりすることなく、別の話題について言及していく(06, 10, 12行目)。また、和代と昌美も、04行目に対して言語的および身体的な反応を示さない。房は、辰雄の発話に反応しうる位置において「りんご」(07行目)と発話するものの、この時の房の視線は和代を向いており、これは辰雄ではなく和代への反応であると思われる。このようにして、「横浜のはよくわかんないな」(04行目)は、辰雄自身によってその話題が展開されることも、他者によって反応されることもなく、独り言として構成され、理解される。

次に、発話者が独り言を志向していると理解できる発話が産出されるものの、それに対して他者からの反応が見られる事例2を分析する。昌美は、紙に書いてあるいろは唄を、事例の前から「ならん」(05行目)まで続けて読み上げている。辰雄は、手に持った懐中電灯を操作している(トランスクリプト中では点灯/消灯の操作をON/OFFと表記する)。辰雄の「非常用じゃんこれ」(10行目)がどのように独り言として構成され、他者に反応されているかを分析する。

事例2 (CEJC, K005\_012, 01:05-01:18)

01 昌美 %我が世誰%ぞ常[な\*  
02 房 [° h°  
昌美 >>紙-----\*和代->>13  
>>和代の方を向く->>13  
辰雄 >>懐中電灯->>14  
%ON %OFF  
03 (0.08)  
04 房 ° h[::°  
05 昌美 [なら%ん  
06 和代 [聞いたことあるけど  
辰雄 %ON  
07 和代 |知\*らな[\$° い?° %  
08 昌美 [° うん°  
和代 |首を振る  
昌美 -->\*  
-->\$, , , -->  
辰雄 %OFF  
09 (0.14)%\$(0.05)+\$  
辰雄 %ON

昌美 -->+  
 -->\$辰雄の方を向く  
 \$紙を袋に入れる  
 10 辰雄 +非\*常用\*じゃんこれ%#  
 +棚-->  
 %OFF  
 昌美 \*棚--\*辰雄の手元-->  
 Fig #Fig. 2



#Fig. 2

11 (0.15)  
 12 昌美 °ん\*ん°  
 -->\*棚にある箱-->  
 13 &(0.42)&(0.17)  
 和代 &辰雄-->  
 辰雄 %懐中電灯を棚に置く-->  
 14 昌美 痒い\$  
 \$...-->  
 15 (0.34)&(0.11)  
 和代 -->&  
 16 昌美 こんなか\$何%が入ってる?  
 -->\$箱を手取る  
 辰雄 -->%懐中電灯を床に置きなおす

昌美は、「ならん」(05 行目) まで和代の方を向きながら、いろは唄の読み上げを続けている。それに対して、和代は「聞いたことあるけど知らな°い°」(06, 07 行目) と反応する。すると昌美は、和代に対して「°うん°」(08 行目) と返し、連鎖を閉じている。昌美は和代との連鎖が閉じた後に、身体の方を元々向いていた辰雄の方に戻す (09 行目)。

この間、辰雄は懐中電灯を手を持ち操作している。続いて辰雄は「非常用じゃんこれ」(10 行目) と発話し、懐中電灯の用途を理解したことを示す。これに対し、昌美は「°んん°」(12 行目) と小さい声で反応する。

辰雄は「非常用じゃんこれ」(10 行目) と発話すると同時に懐中電灯にあった視線を前方の棚に向けており (Fig. 2), 近くにいる昌美に視線を向けたり懐中電灯を提示するなどをしておらず、発話に対する反応への期待を示していない。しかし、昌美は辰雄に視線を向け (10 行目, Fig. 2), 「°んん°」(12 行目) と辰雄の発話に連鎖させている。これは、辰雄の発話が、和代と昌美の連鎖が閉じた位置の直後に産出されたことと、昌美がその直前に身体の方を辰雄の方向に向けていたことにより、昌美の注意を引きやすかったことで生じたものと考えられる。また、辰雄が意図していなかったとしても、「これ」などの指示詞は通常、他者の注意を引

く注意喚起装置 (attention getting device; Mondada, 2013) になりうる。

昌美は、約 0.9 秒という短い時間の視線と、小さい声で、辰雄に対して最小限の反応をしている。昌美の反応は弱く、また次の昌美の発話は別の話題に移っていることから (14 行目「痒い」), 昌美は辰雄の発話を独り言として理解しており、続けて会話する志向は示していない。また和代も辰雄に視線を向けてはいるが (13-15 行目), 発話による反応をせず、昌美と同じく辰雄の発話を独り言として理解しているように見える。

このように、事例 1 や事例 2 では、発話者が独り言であることを明示しながら発話しており、それに対して、共在している他者もその発話が独り言であることを理解した上でふるまっていることがわかる。

他方、発話者が独り言であるかどうかを曖昧に示す場合も見られる。次の事例 3 では、和代が部屋の入り口近くの棚の前に座って作業し、昌美が部屋の中心で立って話している。辰雄は作業中の棚の上を、房は手元のアルバムを見続けている。和代の「あこれあれだ: 藤沢周平だからちょっと見て読んでもいいかも」(07-09 行目) が、どのように独り言ともそうでない発話とも聞こえる曖昧なものとして構成され、他者に反応されているかを分析する。

### 事例 3 (CEJC, K005\_012, 18:30-18:44)

01 辰雄 なんでこれ紐が\*  
 和代 >>棚-->  
 辰雄 >>棚の上-->  
 房 >>アルバム-->  
 昌美 >>帽子-----\*辰雄-->  
 02 (0.34)  
 03 辰雄 つ\*ながってんだこれ  
 昌美 -->\*辰雄の手元-->  
 04 昌美 (おとつお)だから地震のと\*き落ちないようにでしょ  
 -->\*下-->  
 05 (0.13)  
 06 辰雄 °あ::|あ:[:°  
 07 和代 [あ これあ\*れ\$だ:  
 和代 |棚の本の表紙を確認する-->  
 昌美 -->\*和代-->  
 \$帽子を自分の足下に置く  
 08 #(0.23)\$ (0.21)  
 昌美 \$袋の縛り目をほどく-->  
 Fig #Fig. 3



#Fig. 3

09	和代	藤沢 周平だからちょっと見て読んでもいいかも ->	棚の眼鏡を 手に取る->
10		(0.81)	
11	辰雄	°° あ:°° \$	
	昌美	->\$	
12		(0.16)*(0.80)\$(0.29)	
	昌美	->*手元->	
		\$袋からキッチンタオルを出す->	
13	昌美	あ キッチンタオルが 出\$て*きました	
	和代	->	眼鏡の袋を取る->>
	昌美	->\$	
		->*下->>	

昌美と辰雄の連鎖 (01-06 行目) が閉じられそうな位置で、和代は「あれあれだ:」(07 行目) と発話する。これは昌美と辰雄の連鎖とは無関係の発話であり、新しい連鎖を開始しうる発話である。「あ」で気づきを示し、「これ」という他者の注意を喚起する指示詞を用い、「あれだ」という表現によって、続けて「あれ」についての発話が続くことを予示している (cf. 林, 2008)。ここで和代は棚に視線を向け続けており、宛て先は示されていないものの、発話の構成によって、誰かの注意を獲得しようとする志向が示されている。

0.44 秒の間 (08 行目) を空けて、和代は棚に視線を向けたまま、「藤沢周平だからちょっと見て読んでもいいかも」(09 行目) と発話する。この発話は、一方では、昌美に対して提案という隣接ペア第一成分 (Schegloff & Sacks, 1973) を宛てているようにも聞こえる。和代は、家族という成員カテゴリー (Sacks, 1972) を利用し、「母」として「子」である昌美に、「藤沢周平」の本を読むことの提案を暗示的に宛てている (tacit addressing; Lerner, 2003) とも理解されうる。他方で、和代の発話が昌美に対する提案を構成しているならば、本を昌美に見せるなどの身体的行為が伴ってもよいはずだが、そのようなふるまいは見られない。また、和代は発話し終える前に眼鏡を手にとっており (09 行目)、話しながら次の作業に移っているため、本の話は終了しているようにも見える。このように、和代の発話は、昌美への提案にも自己完結的な独り言にも聞こえるような、曖昧な構成となっている。

昌美は、和代が話し始めると和代に視線を向けて話を聞いているが (07 行目, Fig. 3)、明確には反応せず、別の話題へ移行する (13 行目)。和代の発話の曖昧さに呼応して、昌美も明確に反応していないと考えられる。

発話者の発話が独り言であるか他者に反応を求める行為であるかが曖昧な時、共在する他者はその発話者の身体的な志向性を観察し、どのように反応すべきか

を判断していることが考えられる。

#### 4. まとめ

相互行為の焦点が常に定まっているわけではない共在状態において、発話者は、自身の発話が独り言であることを、発話の連鎖上の位置や身体志向性によって示していた。それに対して、発話者と共在している他者は、その発話が独り言であることを理解し、反応を示さなかったり、反応を示すとしても最小限に留めたりしていた。また発話者が独り言を構成しているのか他者からの反応を求める行為を構成しているのかが曖昧な場合、共在している他者は、反応を示すべきかどうかを、発話者の身体的な志向を観察することによって判断していた。

#### 文献

- Garfinkel, H. (2002). *Ethnomethodology's program: Working out Durkheim's aphorism*. Rowman & Littlefield.
- Goffman, E. (1963). *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. Free Press.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, C. (1981). *Conversational organization: Interaction between speakers and hearers*. Academic Press.
- 林 誠 (2008). 相互行為の資源としての投射と文法：指示詞「あれ」の行為投射的用法をめぐって. *社会言語科学* 10(2), 16–28. [https://doi.org/10.19024/jajls.10.2\\_16](https://doi.org/10.19024/jajls.10.2_16)
- Keevallik, L. (2018). Sequence initiation or self-talk? Commenting on the surroundings while mucking out a sheep stable. *Research on Language and Social Interaction*, 51(3), 313–328. <https://doi.org/10.1080/08351813.2018.1485233>
- 小磯 花絵・天谷 晴香・居關 友里子・白田 泰如・柏野 和佳子・川端 良子・田中 弥生・伝 康晴・西川 賢哉・渡邊 友香 (2023). 『日本語日常会話コーパス』設計と構築. *国立国語研究所論集*, 24, 153–168. <https://doi.org/10.15084/00003692>
- Lerner, G. H. (2003). Selecting next speaker: The context-sensitive operation of a context-free organization. *Language in Society*, 32(2), 177–201. <https://doi.org/10.1017/S004740450332202X>
- Mondada, L. (2013). Deixis: An integrated interactional multimodal analysis. In P. Bergmann, J. Brenning, M. Pfeiffer, & E. Reber (Eds.), *Prosody and embodiment in interactional grammar* (pp. 173–206). De Gruyter. <https://doi.org/10.1515/9783110295108.173>
- Mondada, L. (2018). Multiple temporalities of language and body in interaction: Challenges for transcribing multimodality. *Research on Language and Social Interaction*, 51(1), 85–106. <https://doi.org/10.1080/08351813.2018.1413878>
- 西阪 仰 (2008). 分散する身体：エスノメソドロジー的相互行為分析の展開. 勁草書房
- Sacks, H. (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in social interaction* (pp. 31–73). The Free Press.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8(4), 289–327. <https://doi.org/10.1515/semi.1973.8.4.289>
- 高梨 克也・坂井田 瑠衣 (2022). 日常生活場面の相互行為分析. 鈴木 宏昭 (編) *認知科学講座 3 心と社会* (pp. 103–140). 東京大学出版会